

戦争の長期化は人々の生活にさまざまな影響を与えます。

「<sup>きよこくいっち</sup>拳国一致 (=国全体がある目的のために一体となること)」という言葉のもと、軍人や兵士を除いた国内の人々も「銃後」という形で後方支援を強制されました。当時の一般的な暮らしとはどのようなものだったのでしょうか。



焼け跡を背景に笑顔を見せる子供たち  
(神田小川町三丁目西町会  
創立50周年記念誌所蔵)

**人不足、モノ不足との戦い**

日本軍の支配地域が拡大するのと比例して、徴用される兵士の数も増えていきました。その結果、成人男性が極端に減り、国全体が深刻な人手不足に悩まされるようになります。

また、昭和14(1939)年7月8日には「国民徴用令」が出され、兵役以外にも重要産業への労務が国民の義務となりました。翌年には「配給制」が実施され、食品や生活用品は配給切符がないと手に入れることが難しくなっていました。

太平洋戦争開戦後には「金属類回収令」が発令され、お寺の鐘や家庭の鍋なども供出対象に。生活はますます厳しくなります。そんな中でも昭和通りの緑地帯を畑に転換したり、代用品などに頼ったりして、空襲の続く不安な日々をやりくりしていました。



昭和19年1月、大きなのぼりを先頭に出征を見送る(富士見坂上)。手前に見えるのは明大通りを走っていた市電のレール  
(神田小川町三丁目西町会創立50周年記念誌所蔵)

# 銃後の 守り



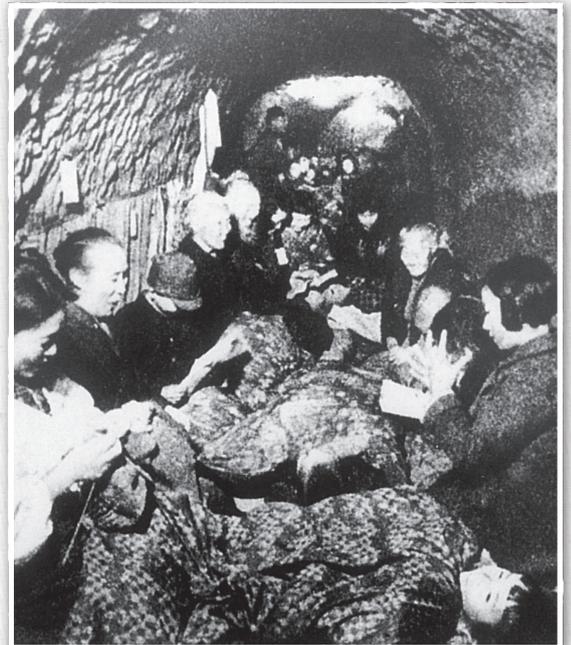
「国土防衛」のため、防空演習やバケツリレーがひんぱんに行われた  
(麹町小学校所蔵)



臨時召集令状(通称=赤紙)を受け取った人は、記載された日時・場所に出頭するのが国民の義務だった  
(昭和館提供)



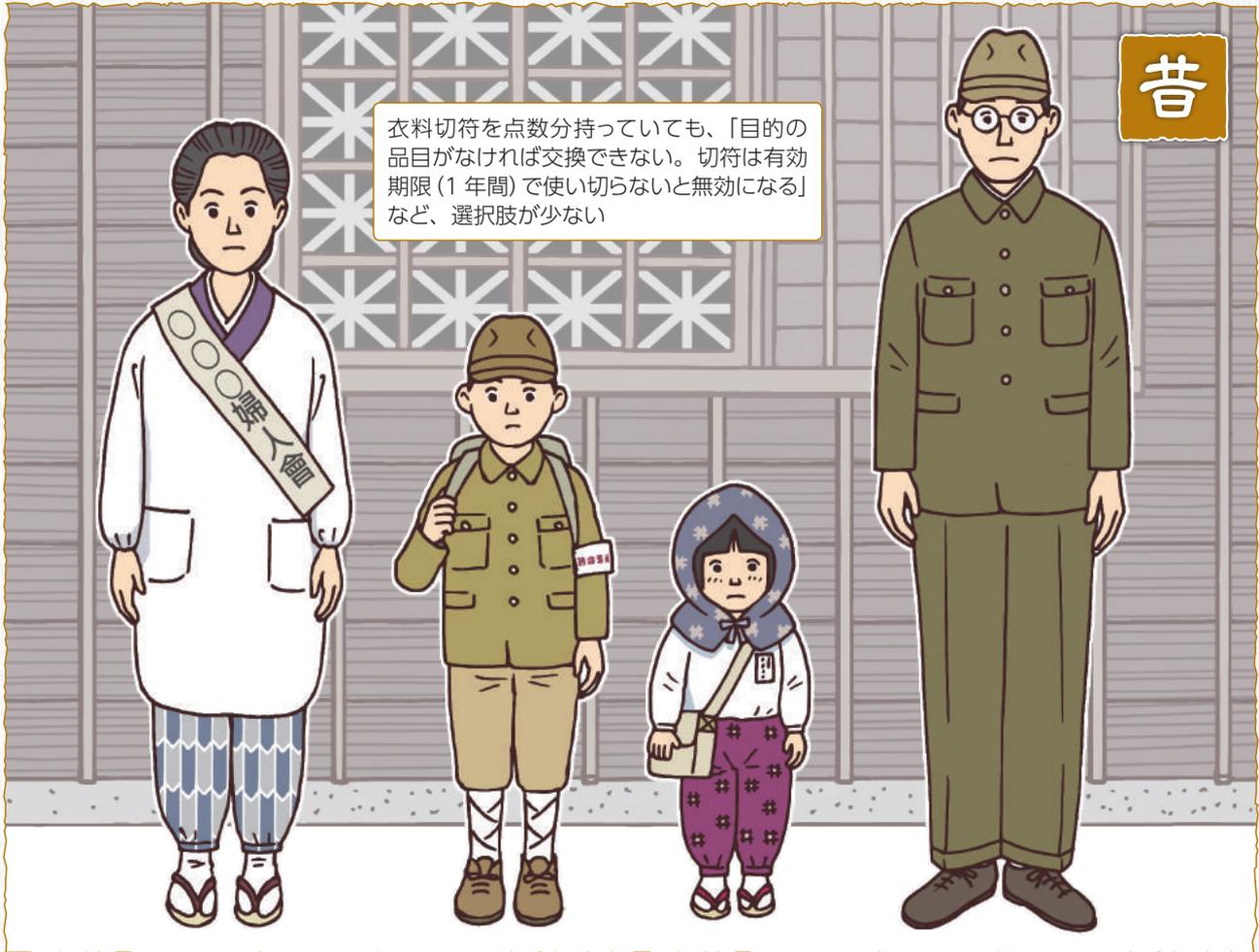
「無事に戻ってきてほしい」と、多くの女性たちが一針ずつ思いを込めた千人針  
(千代田区教育委員会所蔵)



防空壕の造成や維持も銃後の大切なつとめ。場所は個人宅の庭や校庭、道路脇など土に穴を掘って作られた  
(麹町小学校所蔵)

## 衣服

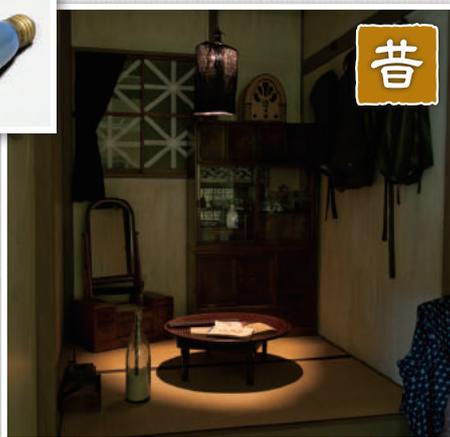
昭和15(1940)年、「国民服令」が公布され、服装までも戦争の影響を受けるようになりました。男性は軍服と同じカーキ色の「国民服」が推奨され、女性は「もんぺ」姿に様変わり。布も粗悪なものしか手に入らないうえ、衣料切符を持っていても自由に買い物ができないことも多かったようです。



衣料切符を点数分持っていても、「目的の品目がなければ交換できない。切符は有効期限(1年間)で使い切らないと無効になる」など、選択肢が少ない

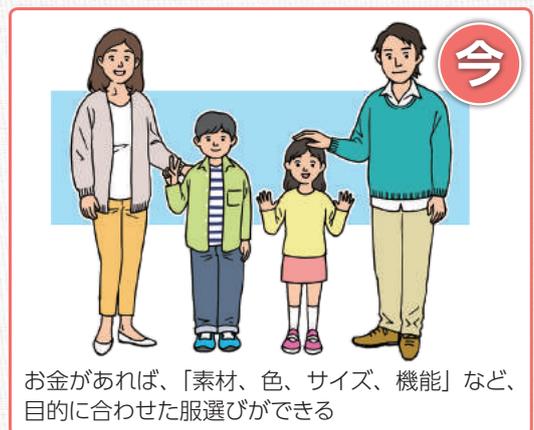
昔

## 戦時下と今



昔

灯火管制用電球(昭和館提供)、当時の室内(協力:東京大空襲・戦災資料センター)



お金があれば、「素材、色、サイズ、機能」など、目的に合わせた服選びができる



今

## 灯火管制

空爆への備えとして、室内の明るさも制限対象に。直下だけが光源となる電球もありました。

## 隣組と配給

昔



麹町区隣組回報  
(すべて千代田区教育委員会所蔵)

戦争の長期化で品不足となり、「お金があっても買い物ができない」時代がきます。そこで政府は食料や生活必需品を中心に「国民のモノの必要量」を配給切符で定めて分配することにしました。人々は「いつ・なにを・どこで・どのくらい配るか」や防空訓練の予定、行政からの案内などを回覧板で知ります。不自由な状況下で生活の基準を「隣組単位」にすることは、ヒトとモノの流れを相互に監視しあう側面もあったようです。

### 衣料切符 (1人: 1年間に100点)

国民服…32点/着物<sup>あわせ</sup>裕…48点/国民服外套…40点/小学生服上衣…17点/小学生服ズボン…5点/小学生服スカート…5点/もんぺ…10点/足袋…2点/学童用ソックス…1点 など、細かく点数が決まっていました。



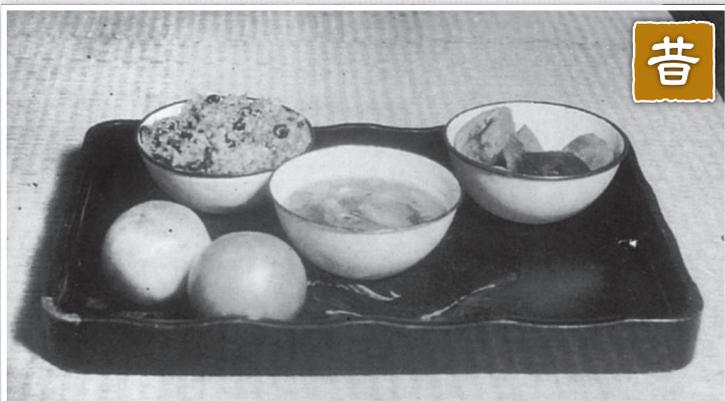
家庭用品購入通帳 衣料切符

今



## 食事

普段の食生活はとても質素で、食材は限られていました。そのため今ではあまり食べない植物の根や茎でさえ、工夫して大切に調理しました。



疎開した児童をもてなすために作られた「赤飯」のお膳 (麹町小学校所蔵)

昔

今



現在の給食  
(千代田区教育委員会提供)

こんなに違う。

## 情報入手

遠方の情報を知る手段は、新聞やラジオ、軍事郵便、回覧板や伝単(ピラ)と非常に限られていました。軍事郵便は軍の検閲が入り、黒く塗りつぶされることも。



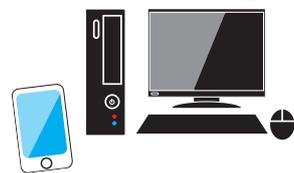
米軍投下のピラ  
(千代田区教育委員会所蔵)



軍事郵便  
(広瀬儀光さん提供)

昔

今



# あちこちに見える「戦争の影」

商売もできず、食べるものも極端に不足し、情報も制限されている中で人々はどのようなモノに囲まれて暮らしていたのでしょうか。

## 生活

金属や皮革などは軍事利用を最優先としたため、一般に行き渡らなくなりました。そこで開発されたのが「代用品」の数々。湯たんぽの素材は陶製に代わり、ランプシェードは紙製に。また石油ではなく木炭で走る自動車も生まれました。戦後は不要になった鉄かぶとを煮炊きの鍋として使った例もあります。



湯たんぽ



ランプシェード



鉄かぶと  
(すべて千代田区教育委員会所蔵)



後方に見えるのは、木炭自動車  
(広瀬儀光さん提供)

## 学び

南方の植民地にいる児童向けの『初等学校日本語教本』や、図入りでていねいに解説された『救護実習指導書』などの教科書類や「愛国百人一首」にも軍事色がうかがえます。



初等学校日本語教本  
(国立国会図書館所蔵)



救護実習指導書  
(国立国会図書館所蔵)



愛国百人一首  
(昭和館提供)

## 防火

空襲による被害を最小限で鎮めるため、町のいたるところに火たたきや防火用水槽が設置されました。しかし、昭和20(1945)年2月25日の空襲は神田区を焼き、岩本町の個人宅にあった分銅を溶かすほどすさまじく、防火への備えもほとんど役に立ちませんでした。



軍人会館に設置されていた防火用水槽

溶けた分銅



火たたき  
(すべて昭和館提供)